

「延命治療」は難しい

神戸掖済会病院

麻酔科・救急医長 馬屋原 拓まやはら たく

1. 麻生財務大臣の発言

先日の麻生太郎財務相の失言を覚えておられる方は多いでしょう。「死にません、なかなか」という一言が新聞やテレビでもずいぶんと取り上げられました。わたしの理解する限り発言の要旨は「延命治療に月一千万円以上もの国費をかけている現状はおかしい」「わたし(麻生さん)自身は自分がチューブに繋がれるような延命治療は御免こうむりたい」というものでした。

2. 患者の高齢化

わたしが医師として働き始めたのは15年前。以来ずっと麻酔と救急の仕事に携わってきました。この15年間で手術室や救急外来でお会いする患者様がどんどん高齢化しています。たとえば90歳代の患者様に全身麻酔をかける機会は、昔は年に数回もなかったと記憶していますが、いまではほとんど毎週です。電子カルテをひらいてみれば、自分の受け持ち患者様の大半が80歳代、90歳代。先日60歳代の女性の患者様とお話をしている「あなたのように若くて健康な方の場合は」と言ったらとても喜ばれました。でもこれはお世辞で言ったわけではなく、病院で働いていると60歳代は本当に若いとを感じるのです。

3. 「延命治療」の難しさ

寝たきり、認知症の患者様が毎日のように救急車で運ばれてきます。若くて元気な

患者様なら即座にできる限りの治療をするのですが、80歳代、90歳代で寝たきり、認知症となると話が違ってきます。患者様の状況なども考慮してどんな治療をどこまでするか、治療を始める前にご家族と相談させていただくことが多いです。どんな治療をどこまでするか、この判断がなかなか難しい。医師であるわたしでも難しいと感じます。たとえば呼吸の状態が悪く、人工呼吸器をつけないと命は助からないという場合。人工呼吸器をつければ救命できる可能性もあるし、つけても助からない可能性もある。とりあえず命は助かったが、何ヶ月も場合によっては何年も、死ぬまで人工呼吸器が外せない状態になる可能性もある。どうしましょう、ご家族としては人工呼吸器をつけることを望まれますか？このように聞かれてすぐに答えを出せるご家族はそうそういません。これが正解という答えがあればまだ楽なのですが、残念ながらこの問いに正解はありません。「延命治療」はやめて欲しいとよく言われますが、何が「延命治療」で何がそうでないのか、正直なところわたしにも良くわからないのです。元気だった頃の患者様本人の考え方や希望、ご家族みなさんの人生観をつきあわせて、よくよく相談して決めていただくしかないのだと思います。

4. 変化する高齢者の医療

高齢者の医療に関する常識は時代とともに変わっていきます。わたしは患者様が60歳代なら人工呼吸器をつけるのを躊躇^{ちゅうちよ}しませんが、たとえば90歳代で寝たきり、認知症の患者様だと人工呼吸器をつけるのが本当に良いのか悩んでしまいます（もちろん最終的に決めるのはご家族ですが）。しかし、病院では90歳代の患者様に人工呼吸器をつけることは多いですし、わたし自身その状況に対する違和感が薄れつつあります。もしかすると10年後のわたしは、90歳代で寝たきり、認知症の患者様に人工呼吸器をつけることを躊躇しない医師になっているのかも知れません。

昨年、三笠宮殿下が90歳代で心臓手術を受け無事に退院されたというニュースがありました。90歳代の患者様に心臓手術をするというのは、わたしが医師になった15年前はちょっと考えにくいことだったと思います。ついこの間まで90歳代の心臓手術が成功するとニュースになったり学会発表されたりしていましたが、最近はまったく話題になりません（三笠宮殿下のケースは別として）。おそらくあと数年もすれば、90歳代の心臓手術は多くの病院で行われるごく普通のことになっているでしょう。

5. 減っていきそうな胃瘻

高齢者に対する人工呼吸器や心臓手術とは逆に、だんだんと減っていきそうな医療行為もあります。胃瘻^{いろう}という言葉をご存知でしょうか。口から食べられなくなった患者様のお腹に小さな穴をあけて、胃に直接チューブで流動食を流し込むのです。今の日本では当たり前に行われている医療行為ですが、最近、胃瘻は拒否しますと言われ

るご家族が増えてきた印象があります。NHKで「あなたはどう考えますか？食べられなくても生きられる～胃瘻の功と罪」というタイトルの番組が放送されるなど、このところ「お上」が反胃瘻キャンペーンを打っているようにも感じます。考え過ぎかもしれませんが。もっともわたし自身もいまのところ、もしも自分が口から食べられなくなった時は胃瘻による延命治療はして欲しくないと考えています。

6. やはり「延命治療」は難しい

医療が進歩したおかげで人間はかなり長生きできるようになりました。可能な限り生存し続けたいというのは生物としての本能ですし、親にできるだけ長生きして欲しいと願うのは人間としてとても自然な感情でしょう。だからこそ、どのような状態になったらこれ以上の延命治療は不要と考えるのか、日頃からご家族で少しずつ話しておくことをお勧めします。

と、偉そうに書いたわたしですが、もしも自分の親に人工呼吸器をつけますか？と聞かれたらどう答えるか、実はまだ決めきれていません。両親からはそのような延命治療は絶対に嫌だときつく言われていますし、人工呼吸器をつけても絶対に助からない状況ならもちろん断ります。でも人工呼吸器をつければ助かる可能性が少しある、良いほうに転べば数ヶ月後にはまた一緒に食事ができるかも知れないという状況なら・・・、やはりわたしは迷うでしょう。そもそもその場合、人工呼吸器をつけるのはわたしの両親が嫌がっている「延命治療」なのでしょうか？場合によっては（いつものように、また）わたしは親の言いつけに背くかも知れません。悪いほうに転ばないことを祈りながら。医師のわたしですら、自分の親の話になった

らこの体たらく。「延命治療」の問題は本当に
難しいと感じています。